様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９１９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０２０３

研究課題名（和文）フランスの対アフリカ外交史研究－フォカール文書の調査

研究課題名（英文）History of French African Policy : Research for Foccart Papers

研究代表者
加茂　省三（Kamo, Shozo）

名城大学・人間学部・准教授

研究者番号：１０４１０７７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：フランスの対アフリカ外交はド・ゴール大統領期に体制が確立された。本研究は、ド・ゴールの下、アフリカ・マダガスカル担当大統領府事務総長としてアフリカ外交を中心的に担ったジャック・フォカールが遺した公文書であるフォカール文書に依拠しながら、外交史を実証的に再構築した。
特に1969年にフランスによるチャド介入を分析した。介入の特徴は軍事要員のみならず行政機構整備を目的とする文民要員(MRA)も同時に派遣したことである。これこそが、独立後の旧植民地諸国との関係維持を目的としたフランスによる、力による覇権だけではない、コーペラシオン概念の具現化である。フォカール文書のさらなる調査を今後の課題とする。

研究成果の概要（英文）：The system of French African Policy was established under the presidency of Charles de Gaulle. This research focuses on the historical reconstruction of French African Policy by referring to the archives named Foccart papers that Jacques Foccart, Secretary-general in the French presidency for African and Malagasy affairs has presented to the National archives in Paris.
As case study, this research analyses especially French intervention into Chad in 1969. The significant point of intervention is that France sent not only their military forces but also their civil agencies (MRA) to Chad, by which France aimed to restructure of the administration system in Chad. This intervention realized, therefore, the notion of 'Cooperation' that France would maintain the relations with former Black African colonies not by means of power. For development of this research, the further consultation on the Foccart papers is needed.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係

キーワード：フォカール　フランス　アフリカ　外交史　チャド　ド・ゴール

１．研究開始当初の背景

(1) フランスの対アフリカ外交は、ド・ゴール将軍が大統領の時代（1958～1969）にその体制が確立された。対アフリカ外交の目的は、帝国主義的な発想から抜け出せないフランスが、独立したアフリカ諸国をかつての植民地のようにフランスにつなぎとめ、フランスの大国としてのパワーの一端を構成する勢力圏として維持することにあった。フランスにとってのアフリカの戦略的重要性は、アフリカ問題が外務省ではなく大統領直轄の事項であったことからも明らかである。こうしたフランスとアフリカ諸国との結びつきは、植民地時代から続くフランスとアフリカの政治エリート間の緊密な協調に基づいて発展してきた。

(2) これまでフランスを中心にしておこなわれてきた先行研究は、そうしたフランスとアフリカ諸国間の関係を「特殊な関係」であるとし、その関係を「パトロン・クライアント関係」、「新家産主義」、「外向性」といった概念を用いて説明することに研究の焦点があてられてきた。例えば、ジャン＝フランソワ・メダール(Jean-François Médard)やジャン＝フランソワ・バイヤール(Jean-François Bayart)による研究がある。しかし、フランス政府およびその関係者が残した公文書等の史料に基づく実証的な研究は、これまでの先行研究の中であまりおこなわれていない。それは、史料の中でも決定的に重要と考えることのできるジャック・フォカールの文書が、依然として未公開であることがある。ド・ゴールの大統領時代、ジャック・フォカールが大統領府アフリカ・マダガスカル担当事務総長として、フランスとアフリカのエリートたちを結びつけるネットワークの中心的な人物であった。フォカール文書には約 3600 点の文献史料が含まれており、これはジスカール＝デスタン大統領期の大統領府全業務の文書に相当する膨大な分量である。この文書の完全公開が待たれるが、現在のフランスの文書保存法に従えば、未公開文書でも閲覧申請が許可されれば、閲覧が可能となる。そこで、フランス史家のフレデリック・チュルパン（Frédéric Turpin）等によって、ようやく 2009 年以降に、フォカール文章に基づく研究がフランス国内で徐々に発表されるようになった。

２．研究の目的

(1) 本研究は、フランス国立公文書館に所蔵されているフォカール文書を調査・収集して、ド・ゴール、ポンピドー両大統領の時代におけるフランスの対アフリカ外交史の再構築を目的とする。本研究の成果は日本のみならずフランスや他のヨーロッパ諸国、アフリカ諸国といった国際的にも注目されうる水準に達するものとする。

(2) フランス大統領関係の文書に分類されるフォカール文書の公開は、フランスの文書保存法に従えば、文書発行の 50 年後となる(2008 年改正)。ただし 50 年を待たずとも、フランス公文書局へ閲覧申請を行うことにより、例外的措置としての閲覧が認められる。それでも閲覧申請から閲覧許可を受け取るまでは最低 3 ヶ月の審査期間を要し、許可が下りて閲覧できるとしても、文書のコピーおよび写真撮影は一切禁止されている。そこで文書の内容を記録するには手書きで写すか、パソコンでタイプ打ちする以外に方法はない。フォカール文書は短期間で容易に閲覧・収集できる史料ではない。そこで研究期間内では、フランスの対アフリカ外交において重要な出来事とみなされている、フランスがおこなった次の 2 つの軍事介入にテーマを絞って、史料の調査・収集を考えている。第 1 はガボンで発生したクーデタに対する軍事介入（1964 年）であり、第 2 はチャドへの軍事介入（1968～72 年）。これら 2 つの軍事介入の事例に関して、フォカール文書に依拠した先行研究は存在しないばかりか、学術的な先行研究はきわめて少ない。わずかにロバート・バイテンハイス(Robert Buijtenhuijs)によるチャド介入に関する先行研究が存在するのみである。

(3) このフォカール文書に依拠し、フランスの対アフリカ外交をエリート間の協調という視点で行う実証研究である本研究は、「新たな歴史」を描く可能性を有している。こうした新たな歴史に関する研究は、日本国内でまったく行なわれてこなかっただけではなく、フランスでもまだ現在進行中の研究分野であり、その成果は日本国内のみならず国際的な関心も引きつけることができるものとなると考えている。そこで、本研究の成果は日本語のみならずフランス語等の外国語でも論文にまとめるほか、国内外の学会やシンポジウムの場でも広く公表し、これまでの研究業績とあわせて、単著本のかたちで出版する。

３．研究の方法

(1)フランスの対アフリカ外交史研究として、ド・ゴール大統領時代のフランスによるガボン(1964 年)およびチャドへの軍事介入(1968～72 年）に関するフォカール文書の調査・収集をおこなう。平成 23 年度はまずフランス・パリへと赴き、フランス国立公文書館で目録を参照し該当文書の閲覧請求を行う。平成 24 年度は閲覧許可が下りた文書のうち、ガボン介入に関する文書を閲覧・記録するためにフランス・パリへと赴く。文書の記録には時間を要することからパリに 15 日間滞在して調査する。平成 25 年度はチャド介入に関する文書の閲覧・記録のためにパリに 16 日間滞在し、調査に加えて口頭で報告する機会を設ける。

(2) フォカール文書のみならず、フランス外交文書等の補足史料も、海外調査の際に可能な限り調査・収集をおこなう。また、日本国

内で入手可能な関連史料も調査する。さらにフランスのアフリカ外交に関し研究実績のあるフランス人研究者3名を研究協力者とし、適宜助言を仰ぐこととする。
(3) 所属国内諸学会（日本アフリカ学会、日本国際政治学会、日仏政治学会等）の場で成果を発表し、日本語とフランス語で論文として公表する。さらにこれまでの研究成果を含めてまとめ単著本にする。

４．研究成果
(1) フォカール文書の閲覧に関して、平成23年度および平成24年度の海外調査において、フランス・パリにある国立公文書館を訪問し、フォカール文書の担当官であるジャン＝ピエール・バ氏と面会して、ガボンおよびチャドへの軍事介入に関する文書を閲覧申請した。34の文書に閲覧申請をおこなったところ、24の文書に対して閲覧許可が下された。ただしガボンに関しては閲覧申請したすべての文書が閲覧が拒否されてしまった。ガボンに関する文書の閲覧は許可される可能性がほとんどないとのバ氏からの助言もあって、ガボンを調査対象から外し、チャドに絞った。平成 23 年度に申請して許可のおりた 5 文書に関しては平成 24 年度の海外調査から閲覧を開始した。
(2) しかしフォカール文書の閲覧は、計画どおりに進展させることができなかった。平成24年7月からフランス国立公文書館がパリ市内からパリ郊外への移転作業にはいり、フォカール文書は一時的に閉鎖され、閲覧できない状況におかれた。移転作業は予定どおりに終了し、平成 25 年 1 月に新国立公文書館が開館したが、フォカール文書だけは目録の再整理のため例外的に移転作業終了後も閉鎖状況におかれ、閲覧許可をとった文書でも閲覧できない状況が現在も続いている。移転に関しては詳細なスケジュールまでは直前にならないと分からなかったものの、その可能性は報道等から承知していた。しかし、目録の再整理のために長期間にわたりフォカール文書が閲覧できなくなることは事前に全く予想できなかったことであった。バ氏からも目録の再整理は急な決定であったと説明があった。他方で、バ氏によれば目録の再整理が完了した暁には、フォカール文書に関する有識者によるシンポジウムの開催を検討しており、現時点ではシンポジウムを平成27年１月開催の予定であるとのことである。さらに。シンポジウムに関して詳細が決まり次第、招待したいといわれている。
(3) 海外調査の際に、フォカール文書の補足史料の収集もおこなった。とりわけフランス外務省の外交文書が、ド・ゴールによるフランスのチャド介入に関して詳細な史料を所蔵しており、集中的に調査した。チャド介入全体に関しては、やはり決定的な史料となるフォカール文書を閲覧した上で考察する必要があるが、外交文書からも次の点が明らかとなった。
(4) ド・ゴール大統領の時代、フランスは1968年と1969年の2度にわたりチャドへ介入した。とりわけ1969年の介入は、800名をチャド政府からの正式な要請に基づき派遣し、しかも派遣期間が 72 年までの 3 年間にわたるという、これまでフランスが経験したことのない軍事介入となった。さらに、この介入で特徴的なことの１つに、軍事要員のみならず、行政改革派遣団(MRA)と呼ばれた文民要員が同時に派遣されたことにある。このMRA の派遣にあたってはフォカールの助言が影響を与えたことが確認できる。フランス外交文書はこのMRAに関して、豊富な史料を残している。MRA に関する史料を調査したところ、MRA がチャドの行政システムの再整備を中心とする国家建設をも目的とする壮大な任務を有していたことが分かった。この介入の軍事的な側面は外交文書のみでは十分に考察することができないが、介入が軍事的手段による短期的な治安維持によって旧フランス領アフリカ諸国の親フランス政権を温存させるという目的以上のことを目指した介入であったことはMRAに関する文書から明らかとなった。この点こそが、チャドへの介入に特別な意味を与えていると考えられる。ここから、フランスのアフリカ外交を支える概念として、ド・ゴールが提唱したコーペラシオン(coopération)が有効であることに注目した。
(5) コーペラシオンとは、フランスが独立したばかりの旧アフリカ植民地アフリカ諸国の発展を支援し、それら諸国が将来的に自立できるようになることを目的とする概念である。フランスは、植民地から独立していく旧フランス領アフリカ諸国と連帯しつつも、それら諸国への影響力を行使し続けるという、相反する方向性にあることを成し遂げようとするものであった。フランスは、一方的なパワーの行使や誇示によってアフリカ諸国を従わせるようなヘゲモニーの構築を目指したのではなく、旧フランス領アフリカ諸国がフランスを必要とするような仕組みを公式、非公式に用意して、それらアフリカ諸国にとって必要な存在であり続けようとしたのである。つまり旧フランス領アフリカ諸国およびその政治指導者はフランスの従属下におかれていたのではない。むしろそれら指導者をフランスにつなぎ止めておくために、フランスは彼らを保護下においていたのである。旧フランス領アフリカ諸国の政治指導者たちは、フランスに対して保護を要求し、そうした保護を後ろ盾にするという、いわばフランスからパワーが付与されることにより、国内統治をおこなっていた。フランスは、旧フランス領アフリカ諸国を中心としたフランス語圏アフリカ諸国を保護下におき、コーペラシオンを進めることで、フランスのプレゼンスと影響力を確保してきた。これによりド・ゴールが目指すフランスの栄光、つま

り勢力圏を持つ大国としてのフランスの国際的な地位が維持されると考えられてきたのである。フランスは、フランス語圏アフリカ諸国を保護し続ける限り、コーペラシオンを通じてアフリカ諸国からの要望に応え続けなければならなかった。その一方で、フランス語圏アフリカ諸国の指導者も、政権運営のためにフランスからの保護に依存する戦略をとった。こうして、フランスとフランス語圏アフリカ諸国は不可分な関係にあるのである。フランス(France)とアフリカ(Afrique)からなるフランサフリック(Françafrique)という造語は、まさにこうした不可分性を形容するのに適切である。そして、独立以来、国内情勢が悪化の一途をたどるチャドのトンバルバイエ大統領を支援するための 69 年の介入こそが、こうしたコーペラシオンに基づく具体例なのである。トンバルバイエはチャド内政を旨く運営することができないばかりか、フランスから離反する傾向を示し始めていた。そうしたトンバルバイエの要望に応えるかたちで、69 年の介入はおこなわれたのである。こうしたコーペラシオン概念に基づくチャド介入という分析は、雑誌論文①および学会報告①にて公表している。

(6) フォカール文書を調査する上で、フォカール自身についての研究もまた進める必要があると考えられる。フランスのアフリカ外交においてド・ゴールの側近としてフォカールが果たした役割はしばしば決定的であったにもかかわらず、一官僚であったフォカールが、フランス国民にはっきりと分かるかたちでアフリカ外交の表舞台に立つことはなかった。こうしたフォカールに対し、ジャーナリスティックな分析から「陰の男」と形容されることもあった。特にタブロイド紙を中心とするフランスメディアによって、フォカールは「密室政治の権化」と虚像化されてきた。このようなメディアによるフォカール像がフランス大統領府文書報道局によって収集され、フォカール文書内に残されている(5AG/BDP)。そこにはフォカールが、そうした虚像を報道し続けるタブロイド紙に対して、名誉毀損であるとして起こした訴訟の過程が記録されている。結果として、フォカールは多くの裁判で勝利したものの、カナール・アンシェネ紙に対してだけは訴訟戦略の失敗により、訴えそのものが無効となってしまった。このカナール・アンシェネ紙こそが、フォカールの虚像を最も声高に報じていたタブロイド紙であり、訴訟の無効により、カナール・アンシェネ紙は、さらにフォカールを虚像化させる報道を強化したのであった。ここから虚像化されたフォカールの像が一人歩きし、フランスのアフリカ外交における神格化されたフォカール、つまりあたかもフォカールがアフリカ外交のすべてを操作し支配しているかのような像がフランス国民の間に広まっていったのである。フォカール文書に依拠する実証的な研究は、こうしたメディアにより虚像化されたフォカール像をより実像に近い姿でとらえることを可能にするのである。実際にそうした実像に近い姿でフォカールを捉え直した研究の成果として、雑誌論文②および学会報告②で公表している。

(7) 今後の課題と展望としては、やはり閲覧申請許可の下りているフォカール文書のうち未読の文書を閲覧することにある。担当官のバ氏とは連絡をとり続けており、フォカール文書が閲覧可能となった時点で連絡をもらうことになっている。またフォカールに関するシンポジウムの企画状況についても連絡をもらうことになっており、可能であれば報告者として参加したいと考えている。フランス語での成果報告に関しては、フランスで発行されているアフリカ研究誌であるアフリック・コンタンポレーヌ誌から投稿依頼を受けており、現在執筆作業を進めている。フォカール文書の閲覧した結果を踏まえて、フランスのアフリカ外交に関する既存の研究成果を取り纏めるかたちで単著の出版を進めたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 加茂省三、アフリカの安全保障とフランス、国際安全保障、査読有、第 41 巻第 4 号、2014、19－35

② 加茂省三、ジャック・フォカールとフランスのアフリカ外交、人間学研究（名城大学人間学部）、査読有、第 11 号、2013、29－45

〔学会発表〕（計　２件）

① 加茂省三、ド・ゴールによるチャド介入―フォカール文書の調査から―、日本国際政治学会 2013 年度研究大会、2013

② 加茂省三、ジャック・フォカールとアフリカ―フォカール文書の調査から―、日本アフリカ学会第 49 回学術大会、2012

６．研究組織

(1)研究代表者

加茂　省三（KAMO Shozo）
名城大学・人間学部・准教授
研究者番号：１０４１０７７１